東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2010 年 3 月 12 日

イスラームと豊かさ

大切な皆様。神から教えられた最後の宗教であるイスラームは、人間の精神的な必要性を考慮すると共に物質的な要求性にも応え、それに適った方向で命令事項や推薦事項を教えました。イスラームは、既に西暦７世紀において原則として人類すべてが貧困や貧乏から救われ、そして豊かな生活を送るための基礎を定義し、**8** 世紀及び **9** 世紀には、総合的な「労働法」や「商取引法」を設立しました。これに対して **10** 世紀、**11** 世紀になったにも関わらず、西欧においては、人々が直面していた貧困から救うために何も推薦されず、逆にその状態を継続させるように努力されました。教会にとっては労働の目的は豊かになるためではなく、人が生まれたままの状態を死ぬまで保つためでした。豊かさを追いかけることはただ欲張ることでした。貧困は天からのものであり、神に定められたものでした。豊富な人々は、施しによってその豊かさから救うべきでした。財産の余裕の分は、倉庫に入れるべきで（販売してはいけない）無料で配るべきでした。利息やムラーバハ（財物をその購入原価よりも多い額の代金で転売するような状態を売買）の方法で貸し借りることは憎悪すことでした。[1]

兄弟姉妹の皆様。イスラームは、地上において本来の姿は窮乏や不足ではなく、寛大な主の様々な恩恵による豊富さであることを宣言しています。[2]この世にあるすべての恵は、人のためであり、人間の役に立つために創造されたものです。[3] この基本的見解をもとにイスラームは、豊かさを成し遂げる最も大切なことである労働と商売を強く奨励して来ました。周知のとおり敬愛する預言者は、自ら商売に携わり、あるハディースにおいて、「糧の **10** 分の **9** 分が商売にある」[4] と語られました。

さらに働くことに関した様々なハディースが伝承されています。「誰であれ自らの努力で稼いだものよりよいものを食べることはない。アッラーの預言者であるダーヴード（彼に平安あれ）も自らの手で稼いだものを食べた」、[5] 「あなた方の誰が、ひとかかえの薪を集ってそれを背中に載せ、そして販売することは、与えてくれるかいないかも定かでないのに誰かを訪ね援助を要請することより当然良いことである」。[6] また聖アブー・フライラに伝承されている「私は、お互いを裏切らない限り、二人の共同者の３人目におられる」[7]というハディース・クドスィによって商事会社を設立することを進めました。

もう一方で、学者達は、社会において貧乏を最低限にすることと社会的相互援助のため、イスラームの基本的な崇拝行為であるザカートを制度化され、ワクフ組織を設立されました。このことに関して、偉大な学者であるアブー・ハニーファの「ゼカートを一人に与え、そしてその人を金持ちにさせることをよき思います」という言葉で表現されてように、つまり出来るのであれば、ザーカトの料金を多数の貧困者に分けて施すのではなく、必要としている一人にそれを与え、その状態から救うことをよしとすることは非常に注意をひくものです。

この世とあの世の生活を整えそして私たちを幸福に導いている私達の宗教を良く理解し、それを実際の生活に反映しましょう。忘れてはいけないことは、誰であれイスラームの教えをしっかり守る者は、この世でもあの世でも不幸にはならないということです。

---

1 参照:中世期における西欧経済と社会史, Henri Pirenne, 頁 18.

2 参照:第 24 章第 32 節; 第 9 章第 28 節;第 17 章第 31; 第 89 第 15 節.

3 参照:第 2 章第 29.

4 ムナーウィ, フェイズルカディール, III, 244-245; スユーティ, エル-ジャーミウッサギール 3, 244.

5 デリール・エル-ファーリヒン, II, 543; エッタージュ, II,194.

6 ムスリム,ゼカート, 107.

7 エブーダーブード, ブユー, 27.